7　キリル・ベナーク

レグルス2号の今回の任務は、ビウルジョカ恒星系の資源の再調査である。出発地のトラピスト星系にある宇宙ステーションから、ビウルジョカ恒星系までは、約五十日かかるので、目的地にたどり着くまでかなり暇である。

マテウスと新入りのゴサクは、『ショーギ』という、チェスのような対戦ゲームをしていた。チェスと違うところは、相手から取った駒を、自分の駒として盤面に打てるところだ。マテウスもゴサクも『ショーギ』が大好きである。これまで『ショーギ』をする相手がいなかったマテウスにとって、ゴサクという相手が出来たことは大変喜ばしいことだった。マテウスと同じ趣味が持てることは、ゴサクにとっても船になじむことができてよいことである。

出航してから四、五日経ったある日、ミーティングルームでいつものようにマテウスとゴサクが『ショーギ』を指していると、通りかかったキリルが足を止めた。そして、二人が対戦する様子をじっと見る。

「なんだ、キリルか。君もショーギに興味があるのか。まあ酔っ払いに負ける気はしないがね」

マテウスの言葉には反応せず、キリルは近くの椅子を引き寄せて座りこみ、二人の対戦から目を離さない。そのうちにマテウスはある違和感を覚え、

「んん？」

さくらぷりんと®

と驚きの声をあげる。

「酒は……どうした？」

そう言えば、キリルの手にいつもの酒の瓶がない。それに何と言っても、キリルのはく息が酒くさくないのだ。顔つきもどことなく引き締まっていて、少し緑がかった青色の瞳は精密機械かとサッカクしてしまいそうだ。

聞かれたキリルは、

「今日は飲まない日だ。まあ気にせずやってくれ。見てるから」

それだけ言って、引き続きマテウスとゴサクがショーギを指すのを横から黙って見ていた。キリルはショーギを全くやったことがない。

〔　Ａ　〕、何戦か眺めた後に、

「よし、マテウス。やってやらあ。ゴサク、変わってくれるかい？」

キリルは、ゴサクの手を引っ張って立たせた後、自分がその椅子にどっかり座ってマテウスの真ん前に陣取ると、すぐにパチパチとショーギの駒を並べ始める。キリルの目に光が宿る。

「おいおい、ショーギをするのは今日が初めてなんだろ？　ルールは分かっているのか。だいたいショーギの戦法は何十通りもあって……」

「いいから、やろう。今日が初めてのおれが、マテウスさんの胸を借りるんだ。おれが先手でいいかい？」

キリルはすっかり駒を並べ終えていた。

マテウスのショーギの腕前はセミプロ級である。ショーギの腕にはかなり

さくらぷりんと®

自信のあるゴサクでさえ、五番に二つ勝てれば良い方である。それを、今日初めてショーギをするキリルがまともに戦えるわけがない……はずであったのだが。

なんと、勝負はキリルが圧勝してしまった。あり得ないことである。

あっけにとられるマテウスと、驚きで目を丸くするゴサクが、ほぼ同時に

「本当に、今日が初めて？」

と聞く。

「んん？　初めてだけど……というか、お前さんたちの対戦を何度か見せてもらったからね。やってみると楽しいもんだな」

何ともない様子でキリルが答える。

「お酒を飲まないキリルさんって、すごいんですね」

とゴサクがしみじみ言う。

たしかに、船の中で長い間一緒にいるものの、酒を飲んでいないキリルを見ることは今までにほとんどなかったかもしれない。

「私の記憶が確かならば、キリルのエントリーシートには、こんな天才的頭脳の持ち主ということは一言も書かれてなかった……士官学校も普通の成績で卒業しているはずだが……」

マテウスは、ショーギで負けたショックよりも、キリルの常識を超えた頭の良さに驚いている。

「そりゃそうよ。酒を飲まずにテストを受けちまったら、トップの成績にな

さくらぷりんと®

っちまうだろ。だから、いつも酒を飲んでからテストを受けてたのさ」

さらりとすごいことを言うキリルに、マテウスもゴサクもついて行けないが、かまわずキリルが続ける。

「トップの成績で、主席でございとなれば、いろいろとめんどくさいじゃないか。おれは『ふつう』が好きなんだ。さてさて、頭使ったら酒が飲みたくなった。また相手してくれよな、マテウス」

キリルは、ひらりと手をふりながらキッチンの方へ行ってしまった。酒を取りに行ったのは間違いない。

「キリルさんって、すごいんですね」

あらためてゴサクが言う。キッチンへ行くキリルの背中を見送るマテウスは自分のおでこを右手でごしごしこすっていた。

「いや、私も知らなかった。いつものキリルはただの酔っ払いのバカだったが、酔ってないキリルがあんなに切れ者だとは……」

「勝負に負けたというのに、なんだか、うれしそうですね」

マテウスの顔には、オダヤカな笑みが浮かんでいた。

「そうか、嬉しいのか。そうかもしれない」

それ以来、レグルス2号に新しい常識が加わった。

「酒を飲んでいないキリル・ベナークは超天才である」

さくらぷりんと®

8　イヤな予感

トラピスト系第九ステーションを出発してから七週間に及ぶ航海の末、レグルス2号はようやくビウルジョカ恒星系の外縁にやってきた。

ビウルジョカ恒星系は外縁をドーナツ状の小惑星帯に囲まれている。

小惑星帯から発生している電磁波は、思いのほか強く、そのおかげでレーダーを使って小惑星帯の向こう側を詳しく探索することが難しい。したがって、小惑星帯の中に自分たち以外の艦船が身をひそめていたとしても、探知することが難しくなる。

「うーん……イヤな予感しかしないですね」

ゴサクが不安で顔をゆがめる。

「何がだ？」

マテウスが説明を求める。いつも根拠が必要な男。それがマテウスである。

「この小惑星帯、なんかイヤな感じですね」

縁起の悪いゴサクの言葉だった。もちろん、マテウスは根拠のない感情論に引きずられて判断を鈍らせるような男ではない。引き続き航行を続けるレグルス2号は、小惑星帯を少しよけるように、ビウルジョカ恒星系の内側に向けて通過した。

強い電磁波のため、しばらくはレーダーが使い物にならない。

さくらぷりんと®

息を殺すような気持ちで小惑星帯を通過し、ようやくレーダーの機能が回復したとき、船内には安堵の空気が流れた。

しかし、「なんだよ、何もなかったじゃないか。」と誰もが思ったそのとき、ジョージがカエルを踏みつけたようなうめき声をあげた。

「うげ、なんかいるぞ……」

駆逐艦らしきものが、小惑星帯の陰から現れたのだ。〔　Ｂ　〕レグルス２号を待ち伏せていたかのようである。

ジョージがパネルを操作しながら続ける。

「なあ、マテウス。ありゃ地球連邦の船だ。連邦の、味方の駆逐艦だぞ。なんでこんなところにいるんだろう」

幽霊船でも見たのかと言うほど気味悪そうにジョージがマテウスに聞くのも無理はない。このビウルジョカ恒星系へのハケン調査は、レグルス２号に命じられたものである以上、この恒星系へ他の艦船が来ること自体が不自然である。〔　Ｃ　〕マテウスも何も聞かされてはいない。〔　Ｄ　〕、味方の船なら連絡を取るべきだ。

「よく分からないが、通信を入れてみてくれ」

「了解。『こちらトラピスト系第九ステーション所属、レグル……』」

とジョージが通信を送ろうとした瞬間、直感が働いた。

（やばいやばいやばいやばい）

最悪な予感におろおろしているうちに、ジョージの手元にあるレーダーが、

さくらぷりんと®

相手の駆逐艦の船首から強いエネルギー反応を探知した。

「撃たれる！」

ジョージが叫ぶと同時に、レグルス2号の船内に、ドーンと地震のような衝撃が襲った。

なんと、地球連邦軍の所属と思われる駆逐艦が、こちらに向かって攻撃してきたのだ。

マテウスが即座に指示を出す。

「全速離脱だ！　ジョージ、無駄だと思うがＳＯＳ信号！　ゴサク、手遅れかもしれないが防御ユニット作動させろ」

防御ユニットを作動させてなかったことが悔やまれるが、今はそんなことを言っている場合ではない。こちらが非武装で、向こうが攻撃を仕掛けてくる以上とにかく逃げるしかない。

さくらぷりんと®

9　消えた駆逐艦

逃げるレグルス2号を、駆逐艦が追いかけてくる。

くどいようだが、レグルス2号は非武装船である。そして、武装していない艦船を攻撃することは、『宇宙協定』に反する行為だ。『宇宙協定』に反した艦船は、その場で撃沈されても文句は言えないことになっている。

攻撃を受けて大きく揺れ、けたたましい警告音が鳴り響く船内で、マテウスが考える。

今、レグルス2号に攻撃を仕掛けている駆逐艦も、『宇宙協定』のことはショウチの上でやっているはずだ。非武装船に向けて、しかも本来味方であるはずの地球連邦の駆逐艦が、レグルス2号を攻撃する目的があるとしたら、それは何だろうか。

ジョージが大声を上げながら操作パネルとモニターを交互に見ている。

「左エンジン損傷！　推力ダウン！　どうするマテウス?」

「どうもしない。このまま逃げろ」

「だめだめ、逃げられない。死ぬ死ぬ死ぬ。おれたち死ぬよ、ゼッタイ死ぬ。

マテウス、もう無理！　エンジンもたない！　でもなんか変！　変だよ変だよ！　なんかいるよ！　変なのがいるよ！」

「ジョージ、落ち着け。『なんか変』では分からない」

さくらぷりんと®

マテウスはまだ冷静さを保っている。

「ええっと、駆逐艦の後方に……何あれ？　なんなのあれ、冗談じゃないよ、あんなでかい船見たことないんですけど。でかいでかい、馬鹿でっっか。何あれ？　クジラですか？」

「ジョージ！　報告は正確に、客観的に！」

マテウスに言われて、何とか気持ちを立て直そうとするジョージである。

「ああ、えっと。巨大な戦艦だね。たぶんだけど、幅だけでニキロメートルはあるんじゃない？　あれだよ、クジラとサンマだよ。あ、おれたちがサンマの方ね、分かる？　サンマ分かる？　クジラはサンマをひと飲みだね。もう知らないよおれ……」

サンマと聞いたゴサクが反応する。

「サンマなら、大根おろしをそえるとおいしいですよ。皆さん食べたことありますか？」

「食べたことあるぜ。ジャパニーズ・レストランでな。ありゃうめえもんだ」

キリルは片手で船を操縦しながら、もう片方の手に酒の瓶を持っている。

「なあ、マテウス。一応操縦してるけど、エンジンぶっ壊れてあまり意味なさそうだぜ」

レグルス２号を攻撃している駆逐艦の後ろに現れたのは、駆逐艦の二十倍はあろうかという巨大な戦艦であった。ジョージがクジラにたとえるのももっともであり、そして地球のものではないことは確かだ。

さくらぷりんと®

「駆逐艦に巨大戦艦。もうだめだ……」

ジョージはふらふらとキリルに近づいていった。

「キリル。酒くれ。おれも飲む」

「ぼくももらいます。どうせ死にますし」

ゴサクまでもが、キリルから酒をもらい始めた。

「短い人生だったな……」

酒盛りを始めた三人に、あきれたマテウスが

「お前ら、持ち場を離れるな！」

と言うが、

「だって、あの駆逐艦おれたち殺す気まんまんだよ。おまけにわけのわからない巨大戦艦だよ。もうマテウスも一緒に飲もうぜ」

と三人はすでに諦めムードである。

「こんなところで死ぬなんてよ。誰もおれたちの骨なんて拾ってくれないんだろうな」

「ああ、死ぬ前にもう一回、サンマの塩焼きが食べたかったなあ……」

酒をぐびぐびやりながら、くだらないことを言い合う三人であった。

しかし、よく考えたら、いつの間にか攻撃が止んでいるようだ。

ジョージがレーダーとモニターにかけよって状況を確認する。

「え、おい、ちょ……」

「どうした、ジョージ」

さくらぷりんと®

「駆逐艦（くちくかん）が、消えた……」